

組合士 アラカルト

千代田設計協同組合 事務局長代理

佐藤 康三郎さん
さとう こうざぶろう

プラントを設計することの魅力、繋げることを使命に組合運営中

巨大プラント設計の窓口役

石油やLNGなどエネルギープラント、あるいは、エチレンやアンモニアなどの化学プラント……。われわれが日常生活を当たり前に過ごしているのは、エネルギーや素材原料を備蓄、製造するプラントが日本国内はもとより、世界各地に建設され、日々に必要なエネルギー等のもとを安定的に供給できる体制＝プラントが整っているからである。

このプラントは、「一つの人工都市」と呼ばれるほど大規模な設備となる場合が多く、現在、世界最大級のLNGプラントは、一系列で年産720万バレルの規模があるという。プラント建設は、配管、土木、建築、機器、電気、計装等のさまざまな職種が設計し、それを元に建設、試運転、引き渡し、メンテナンスをするものである。その中心とも言えるプラントの設計を行っている専門家集団。それが、今回お話を伺った佐藤康三郎さんが奉職する神奈川県横浜市の千代田設計協同組合である。

その名前からもわかるように、国内外で活躍している日本のプラント専業3社の一つである、千代田化工建設株式会社。プラント設計を受託する設計事務所をとりまとめる、そんな役割を担っているのが同組合である。組合員はプラント設計の各分野に得意分野を持つ、平均すれば20人規模の設計事務所であり、組合窓口には石油、LNG、化学、医薬等の幅広い

いプラントの設計を行っているのである。現在の組合員数は38社。昭和56（1981）年の組合設立時は80社でスタートし、現在、事務局代理を務める佐藤さんはその翌年昭和57年からの奉職というから、ほぼ組合の歩みそのものを体現している方である。

人と情報の集まる場へくりこむ苦心

プラントは、建設される場所も気候もさまざまなら、その大きさもさまざまである。しかも、プラント設計を受託するたびごとにこれらの条件はすべて変わる「究極の一品モノ」であり、典型的な受注型産業でもある。そして、その設計においては求められるのは、技術的な質の高さはもちろん、そのような技術の上に、毎回変化するプラントの条件に応じた設計に対応できるような経験と勘である。しかし、先に触れたとおり、組合員各社の規模はおしなべて小さい。1社単位でそのような経験や勘も含めた技術・技能を伝えるような人材育成の仕組みを持つことはまず不可能といってしまう。

そこで、組合では組合員各社のトップやベテラン社員を講師に、分野ごとの研修会を開催、組合員各社の人材育成機能を担っている。研修は年間20回以上に及び、その企画から研修内容まで、組合内に委員会を設置し、そこで採み込んだ上、さらに理事会でも検討を重ねて密度の高い研修を実施しているという。佐藤さんを含め3人の事務局は、経理等の通常業務

に加え、これらの研修事業にも密接にかかわっている。内容は高度に専門的なもの。事務局には誰も専門家はいないという状況、さぞや大変なのではと伺うと、「いやいや、何しろ、講師陣を務める各社の社長たちは、あの千代田化工のプラント設計を手がけることができる能力、スキルを持った方々です。言ってみればピカ一の講師陣。われわれも、門前の小僧で、研修事業に携わっている中でのいろいろな勉強ができるんですよ」と佐藤さんはきわめて自然体だ。

胸を張れる講師陣をそろえていると自負するだけあって、この教育研修事業は組合設立から現在まで、組合事業の大きな柱の一つになっているという。もう一つ、組合事務局で力を入れているのは、情報交換・交流の場づくりだ。1990年代の後半から2000年頃にかけて、プラント建設は大不況期を迎え、組合も運営はもちろん、組合員の求心力、一体性を維持することが困難になった時期があった。その中で、「もう一度、組合の基本である、人と人がつながるといって確認しよう、組合員にも認識してもらおう」という視点から、事務局では、さまざまな人と情報が集まる場づくりを工夫した。たとえば、発注元である千代田化工の担当者との昼食会や合同会議を開催、今後のプラント建設の方向性や、具体的なプロジェクトの動向が互いに見えるような交流の場を設けていった。さらに「将来的なことを考え

れば、若手同士の交流は必要不可欠だ」との考えから、組合員各社の若手社員と、発注会社の若手社員が交流できる場を提供するという工夫も重ねているという。課題は若い世代に「設計の魅力」を伝え、つなぐこと。

「組合のこれからの課題は？」と伺ったところ、即座に「景気の善し悪しにかかわらず、教育研修を継続して、技術の伝承を担っていくこと」との答えが返ってきた。その背景には、最近の急速なコンピュータ技術の発達によって、「従来なら現場へ出向いて体で覚えた」ような部分までがコンピュータ上で対応できてしまうという状況がある。「経験や勘が養いにくくなっているのです。しかし、プラント設計は想像力と根気が決め手。また、自分が設計したプラントが完成したときの達成感は何とも言えないものがある。こういうプラント設計の魅力は組合員各社の若い社員のうちに伝え、自分たちのものにしてもらえようという対応が組合として必要になっていると感じています」と佐藤さん。

約30年の組合運営で培った組合員各社とのつながりと、組合士として培った「さまざまな業界を客観的に捉える眼」をフル活用して、協同組合の原点である「人的つながり」を土台にした、新たな仕掛けを考案中とのことである。

